

しぜん つくる あそぶ ↳ コロナの時代の僕ら

豆玩舎ズンゾ 樋口須賀子

元号が平成から令和に代わって二年目の今年、うるう年の二月二十九日（土曜日）には、世界で確認された新型コロナウイルス感染者は八万五千人、死者三千人を超えた。昨年末、中国武漢から始まった新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）は、短期間に世界的流行を果たした。WHO（世界保健機関）は、パンデミックと発表した。

イタリアの作家パオロ・ジヨルダノ（物理学者でもある）が一月末から三月にかけて書き綴った、感染症にまつわるエッセイ集『コロナの時代の僕ら』を読みながら、ズンゾからのメッセージを発信する。

もはやどんな国境も存在せず、州や町の区分も意味をなさない。今、僕たちが体験している現実の前では、どんなアイデンティティも文化も意味をなさない。今回の新型コロナウイルスは、この世界が今やどれほどグローバル化され、相互につながり、からみあっているかを示すものさしなのだ。

日本では、横浜港に停泊のダイヤモンドプリンセス号からコロナウイルス感染者が出て、国を挙げての水際作戦が始まる。イギリス・フランス・イタリアなどヨーロッパの国々からアメリカへと世界中に広まる。

国内では、PCR検査の数も少なく、感染者の数も限られていて、オーストラリアやアメリカ（NY・メイン）在住の友人たちから、日本は甘すぎる、これから大変になると電話やメールが届く。

そして、第一波。まず全国で学校の春休みが早くなり、六月まで休校に。「ステイホーム」、美術館・遊戯施設・各イベント・音楽・芸術・芸能、不要不急の催しは中止。仕事もオンライン（在宅ワーク・授業など）で。満員電車で通勤・通学の日常が止まる。

今までの生活が一変する。世界規模の経済仕組みが大きく変わる。そして、七月開催予定の東京オリンピック・パラリンピックの延期が決定された。四月になると緊急事態宣言が出される。

東大阪の病院で新型コロナウイルスの陽性患者が出たとのニュース、豆玩舎ギャラリーでNPOおまけ文化の会会員による作品展も会期延期となる。館の見学も申込制にして、休館に。子ども達の教室「遊房」もお休みに。重症化しやすい後期高齢者であり、かつ持病のある私は、週一、二回、車で送迎してもらったの出勤となる。

三密を避け、マスク・手洗い・うがい・消毒を励行する以外、得体の知れない新型コロナウイルスに対する処方箋はまだ見つかっていない。大人も子どももひたすら「ステイホーム」に専念した。戦時中の「堪えがたきを堪え、忍び難きを忍ぶ」を思い出させる。

この感染症がこちらに対して、僕ら人類の何を明らかにしつつあるのか、それを絶対に見逃したくないのだ。

地球温暖化の恩恵を受ける病気にはエボラのほかに、マラリア、デング熱、コレラ・・・がある。

つまり感染症の流行は考えてみることを僕らに勧めている。隔離の時間はそのよい機会だ。何を考えろって？ 僕たちが属しているのが人類という共同体だけではないことについて、そして自分たちが、ひとつの壊れやすくも見事な生態系における、もっとも侵略的な種であることについて、だ。

しぜん

二酸化炭素・メタン・フロンガスなどの温室効果ガスの大量排出により気温が上昇。経済発展、生活環境の変化によって、人類がもたらした地球温暖化。自然界が人類に対して、与えた警告の一つがウイルスだとしたら、真正面から自然と向き合って、新型コロナウイルスに対しても私達は真摯に向き合わなければならない。

今年の花見は、自宅の近くを流れる竜田川沿いの桜並木と生駒大社周辺の桜を毎朝夕、眺めることだった。つぼみが膨らんで、自分で開花宣言してから散り終えるまで、鶯の声と川端に咲く草花、川の流れに泳ぐ鯉や鴨の家族の姿に心ませながらのゆったりとした時間。いつもは静かな境内に、歩き始めたばかりの幼い子と母親。こどもとボール遊びする若い父親。犬を連れて老夫婦の姿など、ゆったりとした時間が流れる。ただ、いつもと違うのは、みんなマスクをして、静かだったこと。桜が散った後も、春から初夏にかけて、咲く色とりどりの花や草花を愛でる。

六月になって、緊急事態宣言の解除、学校の再開に即して、子ども達の手作りおもちゃと絵画教室「遊房」も再スタート。修学旅行生などの見学と体験講座や各施設などで行われる講座は中止のままだったが。

レイチェル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』の愛読者でもある岡田三朗さんは、和歌山県紀伊田辺

いことだ。ステイホームの影響で家庭内のゴミが増えたことは問題だが、買い物時のビニール袋の有料化は、遅まきながら、ゴミ問題・自然への影響を考える一歩となる。

長年の夢であったおもちゃ館がオープンすることになったのは、平成三年（一九九二）、いんてる社から発行した『ぼくは豆玩』、ズンゾのおまけ人生を綴った本がきっかけだった。テレビ・新聞・雑誌などマスコミで大きく取り上げられ、グリコピア・イナックス（リクシル）ギャラリーなど各地で、グリコおまけ展やズンゾコレクションと作品展が開かれた。取材の時に「ぼくの夢はおもちゃ博物館を開くことです。」と話したことで、「ぜひ、創ってください。」

戦時中、兄弟で大事にしていた軍艦です。「わたしの宝物のおまけです。そこに飾ってください。」と持参する方が増えて、夢が現実に向けて動き出す。と言っても、その頃、バブルの崩壊が始まり、個人の博物館を建てるのは、夢のまた夢。そして、ズンゾの養父が関わっていた昭和九年（一九三四）に建てられた大阪今里のセルロイド会館（重要文化財）を借りてオープンすることになったのである。そこで、サブローさんとの出会いが始まった。

世界中を旅して集めたコレクションの数々、グリコのおまけや世界のミニチュア、日本の郷土玩具・世界の人形玩具・民芸品などを展示する以外に、手作りおもちゃのワークショップ「一枚の紙から作るおもちゃで遊ぼう」を始める。グリコのおまけとして考案、子どもたちに人気のあったおもちゃを選び、色を塗って、切ったり、折ったりして遊ぶ講座は喜ばれた。サブローさんもお孫さんと一緒に参加、中之島祭りのトンボ王国を支援する催しにズンゾも参

加した。

昭和十年（一九三五）、道頓堀にグリコランナー広告塔第一号が誕生した年、グリコ株式会社広告課に入社したズンゾは、「創意工夫」をモットーとし、おもちゃを三つに分類して考案した。

① 感覚を磨くもの

② 情操を養うもの

③ 知能を練るもの

小さなおもちゃに説明書を入れ、子ども達が自分で組み立てたり、折ったりして遊べるようにした。小さなおもちゃはこどもの心をとらえ、おまけ人気がグリコの売り上げもグングン伸びた。しかし、戦時下、国内でもおもちゃの材料が不足して、おまけの製造も困難になってくる。そんな時、ズンゾが考えヒットしたのが「水滴顕微鏡」である。

近所の子ども達が遊ぶのを眺めていたズンゾがびつくりしたのは、水に浮かぶ葉っぱの穴に出来た水のレンズで光をあてて遊ぶ姿。セルロイドや厚紙で顕微鏡を作り、「穴に水滴を落とすのぞいてごらん」と説明書をつけて生まれた、水の表面張力を利用したこのおまけは戦後にもヒットした。

そして、材料を求めてズンゾは中国天津のグリコ工場へ単身赴任する。戦後、中国から引き揚げて、復活したおまけの製造に関わって、おもちゃに飢えたこどもたちに再び夢と小さなおもちゃで遊ぶ楽しさを届けた。おまけ係からオマケ屋さんになったズンゾだが、晩年に小さな博物館の館長になり、最後まで、こども達と手作りおもちゃで遊んだのは、そんな時代に生まれたオマケのおもちゃだった。

ズンゾのおもちゃや引き換え商品のアイデアに、虫メガネ・双眼鏡・顕微鏡など光学関係のものが多い。こどもはのぞいて、大きく見えたり、小さく見

えたり、太陽の光で紙を焼くこともできる不思議なレンズの世界が大好き。レイチェル・カーソンも小さな生き物を虫メガネでのぞく楽しさを書いている。サブローさんも、自著の中で、戦後の平和な時代に兵士として生き延びた横井庄一さんの話の中で、無人島で生き延びるために必要な道具として、ナイフと虫メガネを挙げています。

ズンゾは、サブローさんと意気投合した。自然が大好き、子どもが大好き、楽しく遊ぶことが大好きなど。歩んだ道も異なるし、知り合って短い時間だったけれど、同じ思い、アイデアマン共通のフィードリングというようなものがあつたのかもしれない。夢の続きを託せる人は、サブローさんしかないと思っていた。

ズンゾが八十九歳で亡くなった時、「豆玩舎が続けていけるかどうか、難しい状況だった。ずっと「自分がいなくなっても博物館を続けてほしい」と言われていた私がまず相談したのは、岡田三朗さんだった。大のタイガースファンである氏は、「あなたは、守りていってください。」

「あなたは、攻めでいきますから。」と約束した。その時以来、私たちは守備サブローさんはじめ、支援してくださいる方たちは攻撃。ひとつのチームとして、いま、コロナ渦中であって、困難な時期を乗り越えるために知恵を集めている。

サブローさんは、朝日新聞の声の欄に何度も投稿されている。平成十四年（二〇〇二）六月掲載分。

長年、刃物作りにかかわってきたが、自由な時間が持てるようになったので、学校、施設などへ出向いて、手作りの楽しさ、大切さを教えている。学校でもおもちゃ作りにとりかかると、こどもたちの顔はいきいきとしてくる。本来、子ども（大人

も)は、ものを作るのが好きなのだ。工業化が進んで、手をくわえなくても使えるモノが増え、ボタン操作のおもちゃがはやり、学校でも〇×で処理できない工作の時間が減り、また危険だからと刃物をもたせないなど、現代社会は手の動きを封じ込めている。

子どもたちは工作が大好きだが、ナイフ、はさみの使い方が下手なのに驚く。おもちゃ作りは、材料選びから始まって、形、動き、色など、あれこれ工夫し失敗を繰り返しながら仕上げている。これは将来にわたっての生きる知恵の訓練になるのではないか。子どもの頃の野遊びから始まって、仕事、趣味、修理、料理など、刃物から計り知れない恩恵を受けてきた。小さなけがもしたけれど、子どもたちは刃物をちゃんと使える人になってほしい。

あそび

手作りおもちゃのワークショップは、人気があつて、館での催し、各地、学校・幼稚園・保育園などで、子どもも大人も楽しんでた。その活動を教室として会員を募集して、絵を描いたり、手作りのおもちゃ(紙・木・貝殻・石・葉っぱなど)作り、陶芸、染色まで、道具を使う大切さと楽しさを伝える場として誕生したのが、「遊房(あそぼ)」である。戦後、大人たちが復興のため、生活のために懸命だった時代、子ども達は、友だちと原っぱで鬼ごっこ、缶けり、縄跳びなどして遊んでいた。学校が終わってから、友だちの家を次々とまわって、「〇〇ちゃんあそぼ」と誘い合っていた。

「遊房」は、幼児から小学生までの会員が集まり、自然と遊ぶ、作って遊ぶ、ものがたりに遊ぶの三本

柱で活動している。豆玩舎が今里でスタートした時から、「なにわ語り部の会」の方たちとの交流が始まり、世界の民話やお話に親しんできた。クリスマス会に宮沢賢治作品の影絵劇(カッターナイフで切り絵にして)を発表するのが恒例になっていたが、今年、『やまなし』の絵本作りを予定している。

サブローさんは、NPO法人おまけ文化の会の理事長として、遊房や各講座の講師として、創意工夫の手作りおもちゃの指導を続け、次々と新しいおもちゃ、フリセミ・トントン相撲・ブンブンごま・パチパチ花火などのデザインと商品化で支援してくださっている。中でもサブローごまは、大ヒットのロングセラー商品。年に一回のサブローごまコンテストは、幼児から大人まで、各自がデザインした作品を募集。アメリカ・ボストンのチルドレンズミュージアム、東北震災後、岩手県大槌町の子ども達や全国から応募がある。例年、審査会が開かれ、表彰式には受賞者と家族が賑やかに集う。

今年も第十二回コンテストが開かれるが、テーマは、『地球』である。募集締め切りは、来年一月。チラシには、次の言葉を添えて。

地球は回っている。

人も、動物も、

虫も、植物も、

水も、

空気も乗せて。

あなたはサブローごまに何を描いて回しますか？

博物館のケースの中には、ズンゾが世界を旅して集めたコレクションの数々がならんでいる。韓国・中国・モンゴル・台湾・シンガポール・フィリピン・タイ・ベトナム・カンボジア・マレーシア・ブータ

ン・ミャンマ・インド・ネパール・パキスタン・アフガニスタン・オーストラリア・ニュージーランド・パプアニューギニア・アメリカ・カナダ・アラスカ・キューバ・メキシコ・ペルー・ブラジル・ガテマラ・チリ・ロシア・ウクライナ・チェコ・スロヴァキア・ルーマニア・ポーランド、エジプト・トルコ・イスラエル・アラブ首長国連邦、南アフリカ・ジンバブエ・モロッコ・ノルウェー・スウェーデン・デンマーク・イタリア・フランス・イギリス・スイス・オーストリア・ドイツ・オランダ・スペイン・ベルギー・ブルガリア・ギリシャからやってきた各国の形玩具や民芸品を作った人たち、遊んだ子どもたちはいま、コロナの時代をどう生きているのだろうか？

多くの旅行者が日本を訪れた。多くの日本人が海外へ旅に出た。たくさん留学生、労働者、ビジネスマン、技術者が世界を歩いてきた。いま、新型コロナウイルス流行により、人々の行き来もグローバル経済もストップしている。

来年に延期された東京オリンピック・パラリンピック、世界から集まる選手や観客、コロナ終息記念？のオリンピックが本当に開催できるのか？

東京・大阪などの感染者は、いまは、減少傾向にある。しかし、ヨーロッパなどでは、再び感染拡大の傾向、第二波と言われる。まだ、ワクチンの開発も決定的とは言えない。中国・アメリカ・ロシアの大国とその他の国や後進国の思惑は異なる。人類が一つになって、コロナウイルス終息に向かうまでの道のりは遠い。

九月二十四日現在、世界の感染者数は三千万人を突破。スペインとフランスでは、一日、三万人の感染者が出ている。ランキング一位のアメリカは感染

者七千万人に迫り、死者は二十万人超え。二位インド、三位ブラジルの数を足すと世界の感染者数の五十四パーセントになる。ちなみにイタリアは二十位。中国二十六位、日本は、八万人で二十七位である。「ステイホーム」から「ゴートウ」に。九月十九日から二十二日の四連休に多くの人が動いた。

水庄のかかった水道管をふさいでいた手をはなせば、水はまた元の勢いで噴出を始める。つまり、感染者がまたしても指数関数的に増え始めるわけだ。こうしてもっとも困難な第三の段階、忍耐の段階が始まる。

現在の膠着状態は甚大な損害を生むだろう。失業、倒産、あらゆる業界における景気低迷。誰もがそれぞれの難題の山とすでに取り組み始めている。僕たちの文明が、スピードを落とすことだけは絶対に許されないようにできているためだ。

コロナウイルスが過ぎたあとも、僕が忘れたくないこと

僕は忘れたくない。今回のパンデミックのそもそもの原因が秘密の軍事実験などではなく、自然と環境に対する人間の危うい接し方、森林破壊、僕らの軽率な消費行動にこそあることを。

僕は忘れたくない。ルールに服従した周囲の人々の姿を。そしてそれを見た時の自分の驚きを。病人のみならず、健康な者の世話までする人々の疲れを知らぬ献身を。そして夕方になると窓辺で歌い、彼らに対する自らの支持を示していた者たちを。

家にいよう。そうすることが必要な限り、ずっと、家にいよう。

イタリアでパオロ・ジオルダーノがエッセイを書いてから半年、『コロナの時代の僕ら』は、世界中で多くの人たちによって読まれた。「ステイホーム」世界中の人々が経験した隔離の日々を忘れないために、苦しい経験を無駄にしないために、ジオルダーノは「元通りに戻ってほしくないもの」のリストを作ろうと呼びかけている。

「ちいさいことはいいことだ」は、高度成長の時代にズンズンが記したことばである。

グリコのおまけは、戦時中、物資が乏しくなり、経済統制が厳しくなっても廃品やむきカスを利用して、木工品でも細い雑木で間に合うので、他の玩具に比べて延命してきた。おまけの何十倍何百倍もの材料を要した玩具よりも、小粒のおまけの魅力にひかれる子どもが意外と多いのである。

地球の古代、巨体の恐竜やマンモスが滅亡していった。地球人類にとってだんだん世界は狭くなっていく。どうして今すぐ、人類は体格を大きくするより、小さくしようと考えつかないのか。ゴリラよりチンパンジーの方が賢いように、小さい方が頭もよくなるのではなからうか。グローバルに、人類こそって小さくなる運動を展開してみよう。

全人類の小さくなる運動に成功したら、「ちりめんじゃこのお頭つきでお祝いということになる。グリコのおまけの飛行機で飛びまわる。そうなたら地球の資源はあり余ることになるだろう。早く蟻のような人間社会になりたいものである。

昭和五十二年（一九七七）

第二次世界大戦く戦後復興く高度成長くバブルく新型コロナウィルスの時代を経て、これからの子どもたちには、どんな未来が、世界が待っているのだろうか？

三月、神社の境内で出会った赤ちゃんは、マスクの大人を見て、人見知りしていた。最近出会った生後六か月の赤ちゃんは、ニコニコ笑っていた。周りの人たちがみんなマスクをしている異常な状況が当たり前の環境になっている。子どもたちにとっても、昨年とは全く違った環境が日常の生活になっている。

太陽の光、風がほこぶ薫り、雲の形、雨の匂い、虫の音、鳥のさえずり、木々のささやき、草花の愛らしさ。自然を愛でるところと季節の移ろい。忙しい日常生活の中では気づかなかつた自然の恵みと人の優しさ、自分も自然の一部であることを心に刻む日々。

「遊房」の教室に通う子どもたちが増えている。コロナ禍の今、自然からの贈り物、葉っぱ・石ころ・貝殻などを材料として、工作や道具を使つてのおもちやづくりなどは、子どもの感性を育てるのに大切な時間になるだろう。

※参考資料

『コロナの時代の僕ら』パオロ・ジオルダーノ

早川書房発行

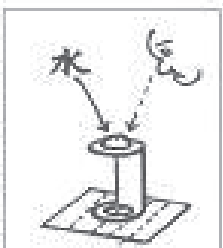
『ぼくは豆玩』

宮本順三著

『孫への絵手紙』

岡田三朗著

新風書房発行



グリコのすいであげんじりまよ